２０１７．１２．２６　大草

読書メモ

74．山折哲雄「仏教とは何か」中公新書（1993.5）

75.　島薗進　「日本仏教の社会倫理」岩波書店（2013.9）（再掲）

76.　ジャレド・ダイヤモンド「昨日までの世界」日経ビジネス文庫（2017.8）

77.　藤村安芸子「仏法僧とは何か―三宝絵の思想世界―」(2013.8)

**＜山折哲雄「仏教とは何か」から＞**

・国民的宗教：

神道と仏教と民族宗教が相互に影響しあって一つの宗教として民族の間に広まった―――これを国民的宗教と名付ける。この国民的宗教が成立したのが、15世紀から１６世紀である。

・現代日本の宗教の可能性：

　①現代は、宗教の枠組みをとりはらう時期にきている（現代日本人は、各派の教義内容はおろか、その区別すらできない状況にある）。日本の仏教が一般化・普遍化したのは、平安・鎌倉仏教によってではなく、15世紀16世紀に整備された死者儀礼によってなされた。

　②各宗派の枠組みと宗祖像の固定化したイメージをゆるめて、「ブッダ」という根本シンボルのもとに連合し統合する方向を模索するべきときにきている。

（死者=ホトケという独自の宗教観を根底にもつ日本人にとって歴史的仏教を読みかえ、組みかえて、一つに統合して行くことが重要課題であると、山折哲雄は考えているようだ。「死」の問題が、まさに宗教の根源的なテーマである。死者を弔い墓を建てることにより、自らも慰められる。宗教とは、自らの慰めと自らの救いのためにあるようだ。）

・祟り：

　「タタリ」とは、もともとは神の現れであった。これが人を害するという意味に変化してきたものである。仏教が日本に伝来したとき、疫病が多発したが、それは神の現れと理解された。そかし、その理解は蘇我氏と物部氏・中臣氏では異なっていた。

　蘇我氏は、仏を敬わないためのタタリと解釈したが、物部氏・中臣氏は、日本の神々を敬わないためのタタリであると解釈した。仏教の取り扱いに関して、両陣営が争った。

・大般涅槃経（だいはつねはんきょう）：

　ブッダの最後の旅を記したものが、大般涅槃経である。「いっさいの苦悩を離れるためには、すべての欲望と執着を捨て去れ。そして、ものごとを正しく観察しなければならぬ。」（69頁）とされ、四諦、八正道（注１）の思想が語られる。

　ものごとを正しく観察すれば、苦の原因は我執（自分に執着する心）にあるため、我執を捨てることが重要である。自我に固執することを止め、「世界を「空｝と観察せよ」さすれば、「死」をのりこえることができるであろう。無明、輪廻、縁起、空などについて、大般涅槃経には解説されてない。

　われわれのような普通の人が、どうしたらそのような真理に近づくことができるのか？大般涅槃経は何も答えてくれていない。自分で考えなさいということか。

・加持：

加持は、本来はさとりに至るための瞑想手段であった。それが、いつの間にか病気治しの手段としての加持祈祷に変化した。

・一闡提（いちせんだい）：

　一闡堤とは、仏法を信じず誹謗中傷する者のことをいう。僧侶や信徒の中にも存在する。仏教の教えを誹謗中傷し、悔いることなく、心に懺悔を持たず、四重禁を犯し、五逆罪をつくってもこれを全く恐れず、嘘ばかり吐いて周囲を惑わし、悪に染まった心を建て替えず、仏法を信じないばかりか、これを公然と誹謗する。

（注１）　四諦：苦、集、滅、道の四つの真理のこと。

八正道：八つの正しいものの見方、考え方。正見、正思惟、正語、正業、

正命、正精進、正念、正定のこと。

**＜島薗進　「日本仏教の社会倫理」から＞**

・中村元は、「宗教と社会倫理」の中で仏教の実践思想や社会倫理の根拠を「慈悲」に求めた。しかし、その反論として、仏教はその始まりにおいても、その後においても「慈悲」を重要視した痕跡が見当たらないという論がある。

・（中村元は）殺生は慈悲に反するものであり、慈悲の心を重んじているとするものである。

・2011.3.11東日本大震災に対する仏教界の対応：

①小高い丘の上にあった寺院に避難誘導

②死者の慰霊と追悼のための読経、法要

③仏教的な倫理性に基づき、僧侶が被災者と「ともに支えあう」「縁り（寄り）添う」

④宗派を超えた「こころの相談室」を開設し、心のケアを実施。例：カフェ・デ・モンク

⑤原発に対する全日本仏教会の宣言文「原子力発電によらない生き方を求めて」を発表。いのちが尊重される世界平和の実現を求めた。

⑥原発はいのちを脅かし、誰かの犠牲の上に成り立つものである。「個人の幸福が人類の福祉と調和する道」を求め、一人一人が「足ることを知り、自然の前で謙虚である」ように志すことを訴求。

⑦「正法」という理念を通じて、仏教は社会倫理的な側面を多様に顕現してきた。

**＜ジャレド・ダイヤモンド「昨日までの世界」から＞**

＜第5章　宗教、言語、健康より＞

・宗教は、現代社会において伝統的なものが衰えを見せずに存在し続けている唯一のものである。（1400年～3000年前に成立）

・経済学の言葉を借りると、宗教は機会費用を奪うものである。宗教に使う時間や資源を他の活動に使っていたら大きな利益が得られたと考えられる。

・地球は紀元前11000年から西暦2051年9月11日までのごく短い期間、人間という生命体に支配されている。宇宙には神と人間が呼ぶ全知全能の存在がいると考える。

・人間の間には数千種類の宗教があり、その信者は自分の信じる宗教以外はすべて正しくないと信じている。

・宗教の定義が難しい。定義は別紙参照のこと。仏教、儒教、神道は宗教であるか否や、最もはっきりしないボーダーラインのケースである。

・宗教の特徴5つ

①超越的存在についての信念

②信者が形成する宗教集団が存在すること

③宗教集団のために信者が多大な犠牲を払うこと

④教義（法、行動規範、タブー、宗教的義務など）の存在

⑤超越的存在は、教義に従う者に報い、悪事を働く者や教義に従わない者を罰する

・政治主義運動は、宗教に似ているが、超越的な存在がいないので宗教とは言えない。

・デンキウナギの６つの発電機能（最高600ボルト。段階的に機能を獲得してきた）

①他の魚の検知

②ナビゲーション

③仲間とのコミュニケーション

④自己防衛

⑤攻撃

⑥獲物の捕食（電気漁）

・宗教の役割・機能７つ（デンキウナギと同様に獲得してきた役割・機能である）

①事象について超自然的な説明

②儀式により不安を解消

③苦悩や死に対する恐怖心を癒す

④制度化された組織（宗教組織として人を組み込んで行く役割のこと）

⑤政治的服従の説示

⑥同胞の他者への寛容

⑦異教徒に対する戦闘行為の正当化（⇒神の名による悪行が許される！！）

・宗教に関して：

　マルクス：宗教は人民のアヘンである。（支配階級が被支配者を抑圧し、搾取する手段として宗教を用いていたと解していた。

　ヴォルテール：「神がもし存在しないなら、作り出す必要がある。」

・自宗は、正しい。異教徒に対する殺害行為や略奪行為は許される。

・旧約聖書　ヨシュア記

　「汝の神を信じるものは殺してはならない。」「他の神を信じるものは殺さねばならない」

・人類史上、最大規模の虐殺は、ヨーロッパのキリスト教徒が非ヨーロッパ人に対して行った植民地主義の侵略の時代に起きた（聖書が殺人を正当化した）。キリスト教徒には、同胞市民に対してのみ、十戒のような規範に従うことが求められた。キリスト教会も神から選ばれた支配者に従うことが、市民の義務であると教えた。このように、宗教は、異教徒（敵）を殺すことを許すだけでなく、殺すことを求めた。（⇒宗教の危険性はここにある）

　20世紀においても、他国民を何百万人も殺害する世俗的な理由づけを宗教が与えている。忠誠の証としての殺人である。

・キリスト教は、ユダヤ教と異なり、異教徒のキリスト教への改宗に熱心であった。ローマ帝国におけるキリスト教の隆盛はここにあった。

・悪人又は敵を赦すのは、将来何らかの利益を得たいがためである。

・モルモン教徒の増やし方は、教義に多産奨励、改宗に熱心、教会に年収の１０％寄付が定められていることによる。

・宗教は将来どうなるか。（前掲の宗教の役割・機能の7つがどうなるか、という問題）

①30年後も生活水準が向上していると仮定した場合は、②③は存続し、①④⑤⑥⑦は衰退するであろう。

②30年後に生活水準が落ち、平和が悪化すると仮定した場合は、全ての項目が存続し重要視されるであろう。

**＜藤村安芸子「仏法僧とは何か―三宝絵の思想世界―」から＞**

　三宝絵は984年11月に源為憲が冷泉天皇第二皇女、尊子内親王に献上した仏教関係書で三巻ある。尊子内親王はその翌年985年5月に20歳で死去した。

　上巻：菩薩が実在する「観念世界」を説く

　中巻：菩薩が僧に方が伝えられていく「伝達世界」を説く

　下巻：菩薩が去り、僧が儀礼を行う「現実世界」を説く

☆仏教における善悪の基準（ビックリ仰天）

　仏教においては、善悪の基準が一般のものと異なり、以下のような定義となっている。

善き行い　=自己と他者に楽をもたらすもの

悪しき行い=自己と他者に苦をもたらすもの

従って、例として親の子に対する情愛があげられている。その情愛は、煩悩（執着）であり、心身を悩ませ正しい判断を妨げる心の働きであり、究極の楽を目指すのであれば、克服すべきものである。我が子を可愛がるのは、自分にも相手にも苦しみをもたらすものとして否定される。即ち、親の子に対する情愛は、悪しき行いとされるのである。

☆末法時代の始まり

　釈迦の入滅を紀元前949年とする説に基づいて設定されている時代区分。

①正法（前949年～51年）：仏法が正しく伝わり、さとりのある時代

②像法（52年～1051年）：形式化された仏法が残り、さとりの難しい時代

③末法（1052年～2051年でなく1万年後まで）：法のみが残り、さとりのない時代

☆絶対的な幸福

　如意珠（チンターマニ：思いを叶える宝珠）によりすべての願いが満ち、人は他の生き物と殺し殺される関係を築くことなく生きてゆくことができる。絶対的な幸福は、身が安定するとともに、他者との関係が安定した状態を指している。

☆自利と他利

　大乗仏教は、初期仏教から部派仏教（上座仏教）が見出し確立した「身にたいする煩悩」を巡る議論に付け加えて、人間には、「関係にたいする煩悩」があることを明らかにし、両者の総合的な克服を実現する論を立てようとしたのではないだろうか（60頁）。そもそも大乗仏教は、すべてのものは関わりあいながら成立しているという世界観をもっている。

☆菩薩

　菩薩は「身に対する煩悩」を克服した上で、すべての関係の全面的な転換を目指す。菩薩は全ての生き物に対して「関係にたいする煩悩」をもつ。それはすべての生き物がかかわりあいながら生きているという真理をするがゆえに生じる煩悩である。

菩薩は、我が身を捨て衆生の命を救い続ける。そのはてに夢見られるものが、仏と成るのであり、仏のみはその身をみるだけで他者を救うことができるような力をもっていた。関係の十全性が願われたからこそ、めざすべき身もまた完全なかかわりを実現するものとして思い描かれた。

☆仏は空で常住

仏は空であり常住である。人々の五感でとらえられないものこそが、絶対的な存在である。この認識は通常の人が抱く考えと正反対である。

人にとって五感でとらえられるものが確かに存在し、五感でとらえられないものは存在しない。この考えに対して釈迦がもたらしたものは五感でとらえられるものは確かな実体をもっていないという認識である。

「　　　諸行　　　　　　無常　　」

「　　　諸法　　　　　　無我　　」

その現象の本質をあらわしている

「　　　一切　　　　　　皆苦　　」

　　　　　　仏の知の働きによって見出される

身体を通してとらえられる現象

菩薩は自らの身を不十分なものととらえ、他者の飢えを無常のあらわれと了解する。この菩薩の認識を通じて、人々もまた我が身が確かなものでないことを観念し始める。

☆究極のよりどころ

人々にとって究極のよりどころとなるものは何か。釈迦は自ら隠れることによって、この世の姿形が仮のものであることを示し、人々が五感でとらえられることができる世界をこえたところに絶対的な存在があることを指し示した。人々は釈迦の入滅を経験することによって「無いけれども有る」という存在の仕方を新たに知ったのである。

☆釈迦の入滅

釈迦の入滅は人々に二つのことをもたらす。

①存在を二重の形でとらえることを教える。

一重のとらえ方：目の前にある存在を自らの感覚でとらえる。

（→これは誤りで、すべての現象の本質は無常である）

二重のとらえ方：現象の背後に本体を観念する。釈迦は、仏は空であるという真理を伝えるために、自ら隠れたのである。

②人の側から、仏との関係を築こうとする努力が始まることになる。

人は釈迦を恋うがゆえに善き行いをなそうとする。姿の見えない存在との関係を観念し、十全な関係の実現を目指して、仏と成るための第一歩となる。（釈迦は、仏を恋わせ、人々に善行をさせ続けるために隠れた）

☆法

法は与える側にも与えられた側にも楽をもたらし、最終的にはお互いを仏にする。その遠い未来を思いながら、法を唱え続けるという営みは、自分の行為こそが悪しきものであったという自覚からもたらされる。

☆僧

僧は法会において、法を唱え、法を媒介として仏とかかわる。同時に唱えられた法は、法会に参加している人々の身に届けられる。人々は自ら仏と関わるために何をするのか。それが、供養つまり、花や香や灯をささげるということである。

姿の見えない仏に具体的な物（花や香や灯）を差し出すことによって、仏とのかかわりが人々の目に見えるようになる。他の人が仏に花を供養する姿を見ることによって、自分もまた花の向こうに仏という存在を思い描くことができる。

☆仏

仏という存在が空であると明かされた下巻の世界においては、仏を人間の感覚でとらえようとすることは否定される。仏は美しい色も匂い立つ香りも喜ぶことはない。けれども、仏がそうした現実の五感を超えた世界にとどまる限り、人々との接点は生みだされない。人々が「よさ」を実感し「よき身」を持つ仏をめざそうとするために「よき物」が必要となる。花や香といった「よき物」は「よき身」をもつ仏と「よさ」において連続し、人々の目に見える具体的な物という意味で人々と同じ地平に存在しいている。

香は仏を迎える使いであると語られていたように、仏と人々との間を媒介する存在が、清らかで美しく香り立つ花や香であった。

☆「三宝絵」が語ろうとするのは、国家の維持が究極の目的ではないことを為政者もまた知っているという事態である。

☆聖徳太子は為政者として仏教を利用したのではなく、仏教を弘めるために王子という立場を利用したのである。

☆正しいものの見方

大乗仏教の「空」の思想によれば、あらゆるものはつねに他のものとの関係性において成立しており、固定的な実体をもっていない。しかし、私たちは、通常、さまざまな物をこのように関係の中にある存在とは捉えない。それぞれが固有の実体をもった確かなものと考える。だからこそ、執着が生まれ、苦しみが生じる。

それに対して、仏教は、正しい物の見方を身につけることによって、苦しみから脱することをすすめる。ものを正しく見るとは、ものを関係の中でとらえる、あるいはものを実体ではなく作用をおこすもの、すなわち力として見ることである。「法」という語は、そのように正しい視点から見たときの「もの」をも指している。

☆では、どうすればものの関係の内でとらえることができるのか。その方法を明らかしたのが、仏が法を僧に伝えるという三者のかかわりによって伝達が実現した場面である。

２者（仏と僧）では、相手を実体的にとらえ、執着する。

３者（仏、法、僧）では、個々の存在を関係という視点から捉えることができる。執着しない。

☆絶対的な関係

法を与え、与えられることによって、相手といつか仏と仏として出会うことができる。それは相手との絶対的な関係を築くことを意味している。私たちは、さまざまな人や物と関係を結び、その関係がもたらす苦しみによって悩み惑いながら生きている。そうした関係を望ましいものへ変えていく方法が、法を与えることなのである。

☆究極の目標

法が持っているのは関係を変える力である。大乗仏教はこの法の力によって一切衆生がともに成仏することをめざす。法施と（法施に対する報恩としての）供養が合わさることによって世界を形づくる関係を全面的に転換し、絶対的な幸福を実現する。それこそが究極の目標であった。

以上